

二〇二二年二月二六日

うららかに幹を広げし臥龍松
まほろばの所どころに末黒田が
春の宮哀しみかさね水子絵馬
健願ふ奉納草鞋東風に揺る
観音の背ナを撫でゆく涅槃西風
句帳の手とめて初音に耳澄ます
日脚伸ぶ婦唱夫随に夕散歩
子規堂へ梅天蓋の狭き道

ぼんこ
明日香
もとこ
こすもす
素 秀
たか子
せいじ
智恵子

二〇二二年二月二五日

春水や太古の地層滲ませて
能舞台はねて一発春の雷
烏天狗指差す方に風光る
山に来てもてなしのごと初音聴く
由緒寺辞して草餅家苞に
長々と航跡伸ばし春の凧

む べ
凡 士
智恵子
たか子
たか子
素 秀

二〇二二年二月二四日

春灯し妣の句帳の薄き文字
定年の夫と腕組む梅の坂
山笑ふ術後の検査異常なし
探梅や蹴飛ばして行く土竜塚
ジャズ聴けば湯気踊りだすマグカップ
梅寒や相続のこと話す父

たか子
なつき
明日香
邑
あひる
なつき

二〇二二年二月二三日

石段に折れ線となる春日影
補助輪のとれし子を押し春の風

みきお
智恵子

山家訪ふまあ上がれやと春炬燵

凡 士

二〇二二年二月二二日

春帽子似合ふ百寿の誕生日
卒業歌唄ふ徒らみな変声期
四五本は茹でずに活ける菜花かな
お下がりのセーラー服の卒業す
池うらら水輪の主は何ならむ
閑さや瀬音閉じ込む谷霞
回覧板梅の花屑乗せてくる

みきお
邑
あひる
菜 々
やよい
隆 松
満 天

二〇二二年二月二二日

春泥を跨ぐ子の尻泥だらけ
春寒しいつまでつづくテレワーク
つり橋の足下の溪に風光る
下萌に碑あり淀君自刃の地
猫柳朝日にかむりふりにけり
座り聴く残念石の春愁を
負けん気が口元にあり古雛
河口より昇る潮香や鳥帰る

智恵子
豊 実
みきお
たか子
満 天
たか子
宏 虎
宏 虎

二〇二二年二月二〇日

澎湃のごとくに芽吹く大櫓
御手洗をあふるる水に春日燦
雪解水かぶり憤怒の滝不動
築山の松に寄り添ひ梅真白
洗濯物ためば灰と春匂ふ

凡 士
ぼんこ
なつき
菜 々
こすもす

毎日句会みのる選・二〇二二年二月二八日